

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32641

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13412

研究課題名(和文) ポストコロニアル批評と環境主義の交渉 冷戦期以降の労働論と環境主義の観点から

研究課題名(英文) Negotiations between Postcolonial Studies and Environmentalism: A Critical Study from the Perspective of Labour and Environmentalism in / after the Cold War

研究代表者

西 亮太(Nishi, Ryota)

中央大学・法学部・准教授

研究者番号：60733235

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ポストコロニアル批評と環境主義批評(エコクリティシズムも含む)を、冷戦という時代構造に対する同時代的なリアクションにとらえ、その関係を整理する準備作業を行った。

まず、米国で学会として成立し後に英国やヨーロッパに拡大していったエコクリティシズムの歴史的背景を整理しそこに反左派的な通奏低音を指摘した。また、2010年代から注目されるようになった「ポストコロニアル・エコクリティシズム」の動きを整理し、ポストコロニアル的な視座にとってエコロジカルな視点がその最初期の段階から重要であったことも指摘できた。これらを踏まえ日本を具体的な文脈として、戦後労働運動についても研究をすすめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで別個の動きとして一般的には理解されてきたポストコロニアル批評と環境主義批評(エコクリティシズムを含む)を、冷戦期という時代的な文脈に落とし込み、そうした構造への反応として表れてきたものとして整理する視座を提供することができた。これは、2010年代から注目されてきたポストコロニアル・エコクリティシズムの理論的な分析にも寄与するものであり、また、気候変動に対する社会運動へも一定の視座を提供するものであると言える。さらに、戦後(冷戦期)日本の労働運動、とりわけ森崎和江と「サークル村」における思想に着目することで、反公害民衆運動と上記批評の動きを接続して研究していく可能性を提示できた。

研究成果の概要(英文)：This research project is to prepare investigation of the relationship between postcolonial criticism and environmentalist criticism (including ecocriticism) as contemporaneous reactions to the historical structure of the Cold War.

First, the historical background of ecocriticism, which was established as an academic society in the USA and later expanded to the UK and Europe, was organized, and an anti-leftist undertone was pointed out. Then, the movement of 'postcolonial ecocriticism', which began to attract attention in the 2010s, was analyzed, pointing out the importance of ecological perspectives for the postcolonial perspective from its earliest stages. Based on this, I also conducted research on the post-war labour movement of Japan, especially literature related to the "Circle Village", such as Kazue Morisaki, Gan Tanihawa, and Eishin Ueno.

研究分野：ポストコロニアル批評

キーワード：ポストコロニアル批評 エコクリティシズム 環境主義 森崎和江 サークル村

1. 研究開始当初の背景

(1) ポストコロニアル批評とエコクリティシズムの歴史的整理の不十分さ

植民地主義と連続したものとしてテキスト分析を行うポストコロニアル批評も、自然の表象と環境問題を軸にテキスト分析を行うエコクリティシズムもそれぞれ別個の歴史的経緯はあるものの、1990年代初頭から批評ジャンルとして定着してきた。特にエコクリティシズムは批判的検討が繰り返し成され、現在では多くの関連した批評ジャンルを生んでいる。だが、この両者は時代的な背景を共有しているにもかかわらず、同時代的なものとして、つまりは冷戦構造へのある種の反応として並置して論じられていなかった。だが、以下に挙げる20210年代からの「ポストコロニアル・エコクリティシズム」の隆盛はこうした研究の不備を批判するものでもあった。

(2) 2010年代からの「ポストコロニアル・エコクリティシズム」の隆盛

2010年代に入ったころから、これら上記の二つの批評の特徴を併せ持った「ポストコロニアル・エコクリティシズム」が盛んに論じられるようになった。この問題設定の登場は、グローバル化における環境保護意識の高まりや、かつて植民地であった地域における国際企業の暴力を批判し是正を求める機運が高まる中では、必然的な現象であった。だが、ポストコロニアル・エコクリティシズムについての多くの論集は上記二つの潮流を別個の独立して生じた批評的潮流と位置づけているが、これは、Edward Saidが*Culture and Imperialism* (1993)でグローバル資本主義が発展途上国の環境の変容に加担してる点に注目したNeil Smith, *Uneven Development* (1984)を重要視している点など、これまでポストコロニアル批評と環境主義の間に存在してきた接点を見過していた。また、ポストコロニアル研究の枠組みを保持しながら、そこに批判的に検討されたエコ批評の接続を試みたRob Nixon, *Slow Violence* (2011)の議論は重要な論点を提示してはいるものの、脱植民地運動にマルクス主義や左派批評が与えたインパクトを過小評価することで集団的な社会運動であった運動を個人化する傾向があった。

2. 研究の目的

上記の背景をもとに、本研究では、そもそもポストコロニアル批評とエコクリティシズムがそれぞれ冷戦構造においてどのように形成されてきたかを整理し、そのうえで、それらが看過してきた非西欧社会(ポストコロニアル地域)における反植民地あるいは/および環境主義民衆運動の重要性を指摘することを目標とした。また、そうした非西欧社会における民衆運動の具体例として、北九州における労働運動「サークル村」において展開された思想の研究も目的とした。

3. 研究の方法

本研究は文献資料の調査・収集および読解、国内外の研究会とシンポジウムにおける研究成果の発表とフィードバック、論文及び翻訳紹介による研究成果の公表、に大別することができる。としては、英国ウェールズのスオンジー大学のアーカイヴや大英図書館、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(ロンドン経済大学)のアーカイヴを利用した。としては、複数の国内外の研究会や学会で発表を行った。

4. 研究成果

本研究は、研究の性質上、複数のアーカイヴにおける資料調査を行う必要があったが、研究機関中に新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックが発生し海外渡航が著しく困難となったことから、研究機関の後半においては研究目的を中心に研究を行った。研究目的 および については研究機関の序盤で一定の成果は出せたものの、詳細な検討には至らなかった。

研究目的 および については、まず、エコクリティシズムの成立を冷戦構造という文脈におとしこんで整理することができた。とりわけ米国からはじまったエコクリティシズムはその内部に自然賛美と結びついたナショナリズムが存在し、それが冷戦期の東西対立構造と結びついていたことから、その内部にマルクス主義批評など社会的な問題意識を組み入れる回路が欠落していたことを論じることができた。また、エコクリティシズムが英国で広く注目される時期には、冷戦の終結とかなっていたこともあり、左派批評の終結を高らかに宣言するものもあったことを指摘した。こうしたエコクリティシズムにおける政治的背景の整理を踏まえて、ポストコロニアル・エコクリティシズムの批判的検討において、これまで看過されてきたポストコロニアル批評とエコクリティシズムの交点を指摘した。だが、前述の通り新型コロナウイルス感染症にともなう研究の困難さにより、この点は詳細まで研究するには至らなかった。とりわけポストコロニアル・エコクリティシズムとされる論文のカバーする範囲は南アジアからアフリカ諸国、中南米・カリ

ブ海諸国と広大であり、他の研究者との交流やフィードバック、またアーカイヴ調査を行えない状況では、上述の「交点」となる個別具体的な地域の作品分析や民主運動について研究を深めることができなかつた。これについては、今後の研究課題としたい。

研究目的 については、主に森崎和江の思想を分析することができた。とりわけ、森崎和江の思想が日本帝国主義の延長線上に当時の諸問題を位置づけていたことを指摘し、さらにそうした彼女の思想が醸成された初期のテキストを分析することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西亮太	4. 巻 134
2. 論文標題 「崩壊」を見つめて：「エネルギー革命」期の筑豊と森崎和江のことばを読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界文学	6. 最初と最後の頁 20-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西亮太	4. 巻 3 (408)
2. 論文標題 輻輳な「わたし」から：初期詩作品と批評のことばをつなぐために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 詩と思想. [2次] = Poetry and thought	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西亮太	4. 巻 38
2. 論文標題 ジェネラルな<わたしたち>にむけて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ヴァージニア・ウルフ研究	6. 最初と最後の頁 119-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西亮太	4. 巻 13
2. 論文標題 エコクリティシズムとポストコロニアリズムの「合流」再考 ポストコロニアル・エコクリティシズムの意図と方法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『エコクリティシズム・レビュー』	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西亮太	4. 巻 47/5
2. 論文標題 「定住者」の眼差しを越えるために 移動者の生にむけて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 167 176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西亮太	4. 巻 375/3
2. 論文標題 森崎和江のことば 運動論とエロスのゆくえ 後編	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 詩と思想	6. 最初と最後の頁 118 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西亮太	4. 巻 374/3
2. 論文標題 森崎和江のことば 運動論とエロスのゆくえ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 詩と思想	6. 最初と最後の頁 118 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 西亮太
2. 発表標題 「崩壊」を見つめて：「エネルギー革命」期の筑豊と森崎和江のことばを読む
3. 学会等名 世界分学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西亮太
2. 発表標題 「公害」から「環境」、そして「エコ」へ
3. 学会等名 東アジア同時代日本語フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西亮太
2. 発表標題 (ポスト)冷戦の文化としてのエコクリティシズムとポストコロニアリズム?
3. 学会等名 エコクリティシズム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryota NISHI
2. 発表標題 With or Without a Burning Torch? Rethinking Hayao Miyazaki as an Eco-Leftist
3. 学会等名 Historical Materialism (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryota NISHI
2. 発表標題 Cultures of Coal: the Opening Remark
3. 学会等名 The Cultures of Coal
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nishi, Ryota
2. 発表標題 Mining Alternative Imaginations: Women's Voices, Colonial Experience and Imaginations of the Past in the Postwar Labour Movements of Japan
3. 学会等名 Selective Tradition in the Pacific: A Conference on Class, Writing, and Proletarian Fiction (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 国際シンポジウム「石炭の文化」第一回セッション「石炭の文化」とその多様性 International Symposia: The Cultures of Coal 1st Session: Diversifying the Cultures of Coal	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際シンポジウム「石炭の文化」第二回セッション「ディスアビリティと石炭の文化」 International Symposia: The Cultures of Coal Disabilities and the Cultures of Coal	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関